

ヤン・トゥーレ
Yann TOURET

[Maison Wabi-Sabi 代表 (フランス・パリ)]

日本語訳: 萩 慶子

日本の陶芸に魅了された筆者が、
日本のすみずみまで作家の工房を訪ねた
セラミックツアー（窯場・工房めぐり）について語る。

フランスの地で、

日本のやきものをめぐる息の長い構想を形に—

メゾンワビ-サビ

M a i s o n W a b i - S a b i の 思 い

陶工房 金重周作さん
陽作さんと（岡山県）
2024 年



常滑の
やきもの
散歩道

第
2
回

陶芸家や工房の選定と、出会いの旅

辻村唯さんと（奈良県）
2024 年



瀬戸の窯垣
（かまがき）の
小径（こみち）

デジタルツールで
ツアー計画

日本陶芸に関する調査研究は二〇〇八年より続けています。はじめはインターネットを通じて情報を集め、その後、専門書をはじめ、日本とフランスの美術館、陶芸専門ギャラリー、さらにはコレクターの方々から多くを学んできました。近年ではフェイスブックやインスタグラムも活用しており、これらは驚くほど多くの貴重な情報源となっています。

自分の性格を分析すると、私は几帳面すぎるほどで、物事を細かく計画的に進めるタイプだと思います。たとえば、パソコンのインターネットのお気に入り欄を都道府県ごとに整理し、その中をさらに陶芸工房・美術館・ギャラリー・その他工芸・都道府県公式サイト・ホテル・レストラン・神社仏閣といった項目別に細かく分類しています。そこに登録されているのは、これ

まで実際に訪れた場所と、いつか訪ねてみたい場所ばかりです。これらは私にとって、旅や調査のための単なるメモではありません。有名な観光地から郊外の地まで、すでに訪れた地におけるかけがえのない出会いの記録も含まれます。

自分なりの目印や参考にしていくウェブサイトを、工房の住所などをすべてデジタルマップ上に整理することで、セラミック・ツアー（窯場・工房めぐり）のルートを効率よく計画できるようにになりました。今では、デジタルマップは日本での移動に欠かせない存在です。ジョルダンの乗り換え案内と連携し、距離や列車の時刻がわかるおかげで、陶芸家との面会や訪問スケジュールも無理なく組み立てられるようになりました。

私は、すべての陶芸家が、無料で登録も簡単なデジタルビジネスプロフィールを持つといいと考えています。

千葉県の吉田学さん、そして岩手県の雪ノ浦裕一さんを訪ねました。その後もJapanCraft21のステイブエン・バイメル氏のご紹介により、滋賀県の荒川智さんにお目にかかれました。それは単なる調査旅行ではなく、日本の陶芸文化が今なお土地や人々の暮らしの中に生き続けていることを、自分自身の目で確かめる旅でもありました。

翌二〇二四年秋、一回目の「セラミック・ツアー」では想定外の事態もありました。その旅では、本州南部から九州にかけて各地の陶芸家を訪ね巡りました。鹿児島から高速船で種子島へ渡り、池田省吾さんとお母様にお目にかかれ、温かいご歓待をいただきました。しかし天候の悪化によって予定していた船が欠航し、日帰りの予定が、結果的に三日間、島に足止めされることになったのです。その後の旅程すべてを組み直さなければなりませんでしたが、この足止めのおかげで島の自然

自分の活動や作品を世界中の人々に知ってもらうために、とても有効な手段ですし、工房や作品を広く発信するうえで欠かせない存在になっていると感じるからです。

セラミック・ツアーへ

出発

そして二〇二三年、私は初めての「セラミック・ツアー」を決定しました。三月七日から四月十八日までの六週間にわたり、日本全国を旅しながら六古窯―瀬戸、常滑、信楽、越前、丹波、備前―をはじめ、各地の陶芸の産地を巡りました。加えてメゾンワビ―サビの季節ごとのコレクション展示に協力してもらえることを願いながら、二十名を超える陶芸家と会いました。

このツアーでは、多くの陶芸家との新たな出会いに恵まれたと思っています。各地の陶芸専門の美術館やギャラリー、陶芸店、陶芸家の工房を訪ね歩

くだけでなく、伝統ある六古窯や地域に根づいた窯場にも足を運びました。さらに、日本文化と深く結びつき、何世紀にもわたって陶芸の歴史を育んできた町や村を巡ることもできました。

さらにこの旅「セラミック・ツアー」

では、とりわけ大きな喜びがありました。ツアーを始める前から、初期のコレクションを通してすでに展示に協力してくれていた陶芸家たちに、ようやく会うことができたのです。秋田県で活動する渡邊葵さんと父・渡邊敏明さん、群馬県のユアン・クレイグさん、三重県の倉田英郎さん、そして栃木県の濱田友緒さんら五人の陶芸家です。作品を通して長い時間を築いてきたつながりが、実際の出会いとして叶った瞬間でもありました。

なかでも印象深かったのは、濱田友緒さんが、祖父である濱田庄司氏の自宅で開かれた煎茶の茶会に、私を招いてくださったことです。旅の初めには

と文化を満喫することができました。

このようなハプニングも含め、陶芸家を訪ねる「セラミック・ツアー」は忘れがたい素晴らしい経験だと感じています。私が訪れる陶芸家は、単に作品や作風、出身地だけで選んでいるわけではありません。作品そのものだけでなく、その作家がどんな人生を歩み、どんな環境で育ち、どのような家族の歴史を受け継いできたのかという背景にも強く関心があり、惹かれるのです。また、彼らが私に与えてくれるかけがえのない機会、つまり自らの工房へ招き入れ、仕事場を直接見せてくれることにも深く感謝しています。作品だけでは伝わらない、制作の空気や暮らし、土地との結びつきを感じることでできるからです。

「人里離れた地まで足を運び、自分たちの仕事や陶芸文化に関心を持つフランス人が訪ねてくる」。多くの陶芸家たちは、そのことを驚きつつ、いつ



倉田英郎さん（三重県）
2023年



渡邊葵さん（秋田県）
2023年



濱田友緒さん（栃木県）
2023年



渡邊敏明さん（秋田県）
2023年

も温かく迎え入れてくれます。

私はバスや電車を乗り継ぎ、ときにはタクシーを使って待ち合わせ場所へと赴き、そこで彼らの車に乗せてもらい、さらに奥深い工房のある地へ向かうのです。そうした道のりそのものが、私にとっては日本の陶芸文化の奥行きに触れる大切な時間となっています。彼らはよく、自分たちだけが知る特別な場所へ連れて行ってくれます。そこは簡単にはたどり着けない知られざる山中の旧跡であったり、百年以上の歴史を静かに残す窯跡であったり。

陶芸家の方たちとのコミュニケーションには主に翻訳アプリを使っています。ときには驚くほど奇妙な翻訳が表示されることもあり、そのせいで互いに困惑することもあれば、逆に思わず大笑いしてしまったりすることもあります。それでも不思議なことに、最後にはいつも互いに通じ合うことができます。

陶芸をもっと多くのフランス人、ヨーロッパ人に知ってもらいたいという思いから、定員六名という少人数のツアーを主催し、日本六古窯と現代陶芸作家を訪ねるツアーを実施しています。

陶芸家という

存在

陶芸の研究をはじめた当初から今日まで、私の好きな日本の陶芸ギャラリーは約五十軒あり、それぞれの卓越した識見と洗練された取り扱い作品は、私にとって大切な指針であり続けています。私が日本陶芸への審美眼を磨き始めたのも、まさにこれらのギャラリーを通してでした。まず心惹かれたのは、地方ごとに異なる土や技法、多彩なフォルムの作品、そしてすでに国際的に高く評価されている陶芸家の作品でした。

しかしその後、高い評価を受けてはいないものの、ひたむきに制作活動



瀬戸の窯垣の小径(こみち) 2025年



丹波篠山の蛇窯 2025年

している陶芸家の存在も徐々に認識するようになりました。陶芸の名家に生まれた作家もいれば、独学で道を切り開いた作家、あるいは異業種から転身してきた作家がいる。いろいろな出自を持つ作家全てに共通していたのは、日本の陶芸を新しい地平へと切り拓こうとする、真摯で強い情熱でした。こうして私は、新しい世代の陶芸家たちが台頭していく姿を間近で見届けることになりました。

「うつわ」への 思い

私が関心を寄せているのは、あくまでも「うつわ」です。より芸術性の強い作品——たとえば陶彫や花瓶、あるいは極めて主観性の強い作品——は、主に美術館やギャラリー、コレクターの扱うものだと感じられるからです。そうした作品は多くの場合、日常の中で使われるよりも、棚に飾られ鑑賞の

かつて日本語を学ぼうとしたこともありましたが、私にとっては簡単ではありませんでした。今は日本語を少し理解できる程度で、話せるのも簡単な単語や短いフレーズばかりです。それでも身振りや表情、そしてお互いの気持ちによって、どうにか意思を伝え合うことができています。

私はこれまで多くの国を旅してきましたが、相手やその文化に対して好奇心を持ち、心を開いて接していれば、言葉の壁があっても、必ずどこかで通じ合えるものだと感じています。日本でフランス人やヨーロッパ人に会おうとは思いません。むしろその国の暮らしの中に自然に身を置き、現地の人々と直接触れ合いながら、その土地の文化や日常を肌で感じることを大切にしています。

この陶芸家を訪ねる「セラミック・ツアー」は二〇二三年・二〇二四年に実施しました。二〇二五年からは日本

対象とされ、大切に保管されていることが少なくありません。それ自体が悪いことではなく、一概には言えませんが、私は長年そのように捉えてきました。

一方で、私が惹かれてきたのは、実際に日々手に取り、暮らしの中で生きる「うつわ」です。だからこそ、陶芸における美術投資や市場価値には、これまで一度も関心を抱いたことがありません。私にとってそれは、同じ陶芸でありながら、まったく異なる価値観に基づく別の世界だからです。私は、日々の暮らしの中で使い続けられ、時を重ねることさらに表情を変えていくような「うつわ」に惹かれます。

二〇二〇年、私は一〇〇カ所を超える窯場の歴史をたどるため、本格的な調査に取り組みしました。インターネット上で資料を丹念に掘り下げるだけでなく、各都道府県の機関や美術館・工芸専門機関にも直接問い合わせました。

この調査を通して、日本の陶芸には、地域ごとに驚くほど多様な様式や伝統が存在していることを深く知ることができました。

それに並行して、フランスおよびヨーロッパで調査を行い、人々が日常的にどのような食器を使い、食器棚にどのようなに収められているのかを詳しく研究しました。その過程で、器の用途や形状に基づいた、自分なりの食器分類体系を築き上げることができました。

その中でメゾンワビ・サビの展示として、茶碗を取り上げないわけにはいきませんでした。茶碗は、日本の茶の湯・陶芸文化を語る上では特別な存在だからです。もちろん私は、茶道のための「茶碗」と、日常使いの「飯茶碗」とは、はっきり区別して考えています。またフランスやヨーロッパで日本酒への関心が高まるなか、徳利やぐい呑、片口といった酒器を紹介すること

さまざまな用途に使われます。つまり、一つの器が用途を限定されることなく、暮らしや使う人の感性に合わせて自由に役割を変えていくのです。

一方、日本では、それぞれの器に明確な用途が与えられていることが多く、使い方にも一定の美意識や形式があると捉えます。私は、その日本ならではの独自の文化を大切にしながら、ヨーロッパの自由な感覚とも自然につながる器のあり方を模索しています。

歩みを支えた

もう一人

このプロジェクト「メゾンワビ・サビ」は、決して私一人の力だけで進めてきたものではありません。メゾンワビ・サビのロゴを制作してくれた、パリ在住で銅版画家の寺尾恵さんから、



瀬戸の寺田鉄平さんの工房 2025年



常滑の平野祐一さんの工房 2025年

とも欠かせないと考えるようになりました。これらは日本文化に関心を持つ人々やコレクターの間で、とりわけ人気だからです。

私はこれら特別な作品（特に茶碗や酒器）に対して、あえて共箱（作家による署名が入った）を用意したいと考えました。共箱は、作品に個性と存在感を与えるだけでなく、日本の陶芸文化における価値を示す役割も果たしています。さらに、それは他の日常の「うつわ」と区別し、特別な作品として位置づけるための大切な要素でもあります。

その他の器については、日本に見られる多彩な形を取り入れながらも、フランスやヨーロッパの暮らしの中で自然に使えるよう工夫しています。

たとえばフランスでは、同じ一つのボウルでも、朝食用、ご飯茶碗、ティーカップ、アクセサリー入れ、さらにはキャンドル容器としてまで、さ

ある日、美術を仕事とし陶芸にも深い造詣を持つ一人の女性を紹介されました。「日本の陶芸について疑問や知りたいことがあれば、その人に相談してみるとよい」と勧めてくれたのです。それが岡山県出身で三重県在住の萩慶子さんです。彼女は地元的美術館に勤務する傍ら、展示コーディネートをしており、私の活動を初期から支えてくれています。

日本の陶芸家の中には、海外での展示に興味があっても海外発送に不安や負担を感じる人が少なくありません。フランスやヨーロッパの商業習慣や仕組みが日本とは大きく異なるため、不安を感じるのとはごく自然なことだと思います。しかし日本人の仲介者がいるというだけで、多くの陶芸家は安心します。萩さんは、私が陶芸家と円滑に

やり取りできるよう、両者の間に入って大きな助けとなってくれているのです。このように、言葉だけでなく文化や考え方の違いを理解しながら両者をつないでくれる存在が、とても大切なのだと感じています。

二〇一七年、私は自分が本当に魅力を感じる作品を制作する陶芸家を本格的にリストアップし始めました。二〇二六年を迎えた今、メゾンワビ・サビは単なる個人的な研究やコレクションの枠を超え、これから何百年先へと受け継がれていく可能性を秘めたプロジェクトへと成長していると考えます。

次号では、フランスにおける日本陶芸の評価、フランスの現代陶芸事情などをお話したいと思います。